

2009年7月1日（水）

第23回日本高齢者大会（第1分科会：9月14日、別府市）「参加のしおり」原稿。

依頼字数：1,000字以内、原稿字数：956字。タイトルは実行委員会からの依頼の通り。

## 格差と貧困——「派遣村」行動の交流

大分大学大学院福祉社会科学研究科准教授 垣田裕介

いま、貧困や格差は、日本社会にとってごく一部の少数の問題というよりも、もはや時代を映し出すキーワードとなっています。非正規雇用や失業の増大に見られるような労働市場の劣化、そしてホームレスやネットカフェ難民の増大に表れているようなセーフティネットのよろさ——この国では、人が安心して働き、暮らしていくための基本的な条件があまりも不安定といえるでしょう。

昨年末から今年正月にかけて東京・日比谷公園で実施された「年越し派遣村」には、派遣切りや雇い止めに遭った多くの人々が訪れ、世間の注目を大いに集めました。その他の地域でも、続々と増える派遣切りや雇い止めを背景に、相談・支援活動が活発に取り組みられてきました。私は日ごろ、大分市内で、「自立生活サポートセンターこんぱす」（昨年12月に設立。今年3月から一般社団法人）のメンバーとして、派遣切りや雇い止めに遭った方々やホームレス生活をされている方々の相談・支援活動に携わっています。

その活動を通して見えてきたことがあります。それは、貧困がどのように深まっていき、何を引き起こしていくかということです。例えば、派遣切りや雇い止めに遭うと、収入（カネ）がなくなり、そうすると家賃を払えなくなり、満足に食事ができなくなります。そして、カネがなくなるということは、ただカネがなくなるというだけでは終わりません。カネがなくなると、友人・知人や家族・親戚などとの人間関係を保つことが難しくなっていきます。冠婚葬祭に参加するにしても、出費をとまなうためです。そうしてカネがなくなり、人間関係が切れて社会的に孤立していき、さらにいざというときのセーフティネットが頼りにならないとなると、今度は、貧困で苦しい状況からがんばって抜け出そうという精神面での意欲が失われていきます。

しかし一方で、世間が貧困を見る眼は厳しいもので、がんばればなんとかなるだろう、貧困なのは本人のがんばりが足りないからだだろう、という意見が根強いのも確かです。この講座では、今日の貧困の具体的な実態を通して、各地での取り組みや「派遣村」的な支援活動などの事例を交えつつ、貧困から抜け出して生活を建て直すための基本的な条件、あるいは新たに貧困を生み出さない社会的な基盤について、あらためて問い直したいと思います。